

怒れる男の回顧録

法学部
法律学科4年

大海 裕也

些細なことで大きな怒りを感じる自分に気づいたのは二十四歳の冬のことだった。

大学を卒業して就職し、親元を離れ上京し一人暮らしを始めてから二年。大学に在籍していた四年間で真っ当な人間関係を構築出来なかつた自分が、職場で真っ当な人間関係を構築できないのは至極当然であろう。そんな希薄な人間関係が私を変えたのだろうか。

原因は分からぬがとにかく私が怒りを——それも極度なものを抱きやすくなつたのは事実であった。通勤中誰かにぶつかる、足を踏まれる。知り合の小さな不親切。それ違いざまの舌打ちや睨みつけ。周囲の笑い声は全て私を嘲笑つてるかの様に聞こえた。

私が感じた小さな不快感は瞬く間に心の中に広がつてき、それは怒りへと変わる。全ての人間が私に悪意を持って接しているようになつた。頭の中のどこか冷静な部分が「相手にそんなのぶつける。

怒りを収めるために私がしたのはただひたすら頭の中、私に不快感を与えた人物を罵ることであつた。思うがままに殴りつけ、壁に叩きつけ、脳天を踏みつける。感情のままに相手に暴力をぶつける。妄想で相手を痛めつけることにより私は精神の安定を得ていた。私の妄想は日に日に過激になっていった。両目に親指を突っ込み力任せに引き裂く。相手の口にブーツで蹴りを入れ歯を碎く。人間の急所に松明を挿し体の内側から燃やす。相手が女性や子供であつても変わらなかつた。相手がたとえどんな女性であつても決して性的な暴力は思い浮かばなかつた。ただ純粹に自分の怒りを暴力として直情的だった。

「現実に人を殺してみたい」
その欲求を自認してしまつた瞬間、心の中に殺人の衝動が雪崩のように押し寄せてきた。なにも妄想だけでは満たされなくなつていつた。

もし私が人間以外の——例えば犬や猫、昆虫などにも怒りを覚えていたら、動物を虐待することにより満足感と精神の安定を得ていただろう。しかし不幸にも私が怒りを感じるのは人間のみになつた。蟻に長時間部屋に居座られたり、野良犬に昼飯を奪われることがあつても不思議と私は怒りを感じなかつた。

自己分析をしてみると——恐らく悪意の有無が大きな要因なのだろう。動物はただ本能のままに行動するのみであり私への悪意は無い。しかし人間には理性がある。私が不快に感じた行為全てはその人間の悪意によるものだという考えが私を支配していた。妄想以外での、現実に行動を起こすことによる怒りの解消方法を得られなかつた私は次第に妄想だけでは満たされなくなつていつた。

したようには手に、残酷に殺す必要はない。ただ自分の目の前で、自分の手により死ぬ人間がみたい。

頭の中のどこか冷静な部分、あるいは善なる部分が「一時の怒りで人生を棒に振るのか。家族にどれだけの迷惑がかかると思っているんだ」と諭しても殺人衝動を抑えるには至らなかつた。そして私が犯人だと発覚しないようには至らなかつた。

それから私は何者かに取り憑かれたかのように（回顧するに実際に取り憑かれていた様に感じる）殺人計画に没頭した。まずは殺害対象の選別からであつた。警察が殺人を捜査する際まずは動機の有無から容疑者を絞り込んでいくという。それを考へると社会的に全く私との接点が無い人物を殺すのが安全であると感じた。街中ですれ違いざまに私を怒らせる人物は数多い。しかし日常生活を送る中でそれを尾行し、素性を突き止めその上で殺害計画を練り上げるのは現実味に欠ける。私は探偵でもなんでもないのだから素性を調べ上げることすら困難であるうし、調べ上げることが出来たとしてもそこから現実的な殺害計画を立案、実行するのは不可能に思えた。

リスクと殺害計画の現実性を天秤に掛けた結果、隣人の杉本という一人暮らしの老婆を殺害対象の第一候補に決めた。この老婆にはよくゴミの出し方が悪いと從つていたためである。第一候補にあまり

悪いと文句を付けられた。杉本のそれは決して収集員を困らせてはいけないといった正義感に基づく行動ではない。ただただ自分の鬱憤を晴らすため文句の言いやすいところに文句を言つてただけなのである。杉本とはそういう老婆であつた。

休日と有給を利用して杉本を監視する。この老婆は出かけることこそあれど友人や親類に訪ねられることはない孤独な人間であることが分かつた。また幸いなことにこの老婆は防犯意識が少々欠けていた。流石に玄関の鍵を開けたまま外出することはなかつたが、リビングや台所の小窓（といっても人一人通り抜けられるほどの大ささはある）の鍵はかけていた。この辺りは治安もよくわざわざ窓から侵入する強盗などいない。もしくは、それでも盗られて困るものもないと高をくくつてゐるのである。これならば夜忍び込み、寝首を搔くことなど極めて容易に感じた。我が家も杉本の家も、周囲に街灯は少なく、隣家ということもあり距離も五メートルも無い。忍び込み事を終え逃げ出す際に目撃されるリスクは低いだろう。

杉本と私の関係は客観的にはただの隣人だ。私がゴミ出しの文句を言われている姿を見た住人はいなはずである。仮に居たとしても殺人の動機と結びつけることはまずないであろう。私は外面よく、はいはいと從つていたためである。第一候補にあまり

にも好条件が揃つてゐることに私は軽く小躍りしそうになつた。しかしそのとき頭の中のどこか冷静な部分（もつとも発覚しないように殺害をすると折り合いをつけたことにより本来の役目を失つてゐるのだが）が私に囁いた。「いくら動機が薄いとはいへ他の容疑者が捜査線に上がらない限り、消去法的に容疑者として扱われるはずだ」

自分が容疑者として扱われる可能性に気づいた瞬間殺害計画の粗がいくつも見えてきた。第一に二十四年間犯罪と無縁に生きてきた私が警察の目を欺き自然死に見せることなど不可能だということ。絞殺、刺殺等殺害方法の候補はいくらかあるがどれをとつても殺害事件として扱われることは避けられない。そして私が把握している警察の捜査方法の知識はテレビや推理小説で見た偏ったものだけである。いくら痕跡を残さないようにして思わぬところから私が犯人であるという証拠が出てくるやも知れぬ。それらのリスクを考慮するとまず私が犯人だと発覚しないようにするのではなくそもそも殺害が発覚しないようにするべきだと考えた。遺体も殺人の事実も見つかなければ、殺人事件の前に失踪事件として扱われるはずである。日本の失踪者の内の何割かは発覚していない殺人ではないかとの識者の見解も私を後押しした。

侵入時の痕跡は指紋がつかないよう手袋をし、犯

行のためだけの服や靴を買い（遠方のチーン店で世に多く出回ってるデザイントの物をマスクや帽子をして買うことにして）犯行後は速やかに焼却処分すればまず大丈夫だろう。寝てる杉本の首を力任せに締めれば大した抵抗も無く殺害出来るはずだ。争つた形跡の心配も無い。

問題となるのはただ一つ。遺体の処理方法である。過去の殺人の事例を洗つてみたが遺体を溶かして流しても、排水口の僅かな痕跡が捜査により発見した事例があるようだ。浴槽にワセリンを塗りたくり血の反応が出ないようにして解体した事例もあったが、その事例も世に出回ってるということは結局失敗したのだろう。そもそも失踪した人物の隣人が遺体を溶かせる薬剤や大量のワセリンを購入していたことが発覚すれば警察からはクロとして扱われるのでは間違いない。素人が下手に策を弄するよりも、單純に考えた方がいいのかもしれない。いろいろな候補を挙げた結果遺体を車で運び人の訪れるこの少ない山にでも埋めてしまうのが手つ取り早くかつ安全だと判断した。

この遺体の処理方法の危険は三つ。

一つは遺体を殺害現場から車に運ぶまでに目撃されることである。しかし前述したとおり街灯も少なう家までの距離も五メートルほどである。遺体を黒い袋に入れて、自分も黒い服に身を包めばよほど凝

視されない限り見つかることはないだろう。

二つ目は遺体遺棄の現場まで足を運んだことが発覚しないことである。家から車を一時間ほど走らせた郊外に、周りにほとんど民家がなくピクニッケや登山に行くには傾斜が急で、木々や雑草が鬱蒼としているおあつらえ向きな山があることを発見したのを遺棄現場とした。何度も足を運んだのだが

（車の日撲滅が累積するのは好ましくないため手間ではあったが徒步を選んだ）深夜なら人がいないどころか辺りを通る車すら見当たらなかつた。深夜に遺体を埋める際に誰かと出くわすといったことは無いと言える環境である。もつとも決行当日にたまたまその場に足を向ける人間がいる可能性はゼロではない。しかしその程度のリスクは許容しなければ殺人は犯せないだろう。

杉本が失踪したと思われる日の前後に、深夜隣人が不自然に車を出していたとなれば関与を疑われるのは当然予想できる。現代、我々の頭上には至る所に監視カメラがあり、それは遺体遺棄の山までの道のりも例外ではない。監視カメラを追つていけば私がどこに行つたのかはすぐわかるだろう。よつてなんとしても失踪事件との関与が疑われるには避けなければならない。私は殺害計画を実行する一ヶ月ほど前から夜釣りを始めるにより深夜の外出の言葉が立つ環境を整えることにして、動機も無い、殺害の

て扱われるならともかく失踪事件としてなら隣人の足取りまでは詳しく調べられないだろうと考えるしかなかつた。

もし遺体が見つかった場合衣服や靴、車のタイヤにその山の土や木々が付着しているのはまずい。上記したように衣服や靴は焼却処分する予定のためいとして、車のタイヤが問題だろう。タイヤを交換することも考えたが特に交換するだけの合理的な理由が思いつかなかつた。隣人の失踪時期の前後に不自然にタイヤを交換していたとなればいかにも怪しい。隠蔽のつもりが藪蛇になる可能性が高いように思えた。不本意であるが洗車を徹底するということしか思いつかなかつた。

三つ目は遺体が見つかることである。いくら人が入らない僻地の山と言つても醉狂な人間がピクニックをしたり、将来的に土砂崩れや開発計画が発足すれば遺体が見つかる恐れはある。遺体、それも他殺体が見つかった場合、結局は消去法により私に疑いがかかるだろう。だが発覚が遅ければ警察の追及を逃れられると私は確信していた。遺体が見つかった場合一番問題となるのは監視カメラである。監視カメラについて詳しく調べた結果、設置しているのは自治体や設置場所の管理会社であり、映像は保存容量の都合により普通一ヶ月、長くて三ヶ月程度で消去されていくことがわかつた。動機も無い、殺害の

証拠も無い、遺体遺棄現場に足を運んだ事実も確認できない。こうなればいかに警察が私を追及しても私を有罪にすることも、自白させることもできないだろう。監視カメラについて考えると失踪した杉本の足取りを調べる際にも利用されるはずだ。今季節は冬なので杉本は外出の際によくフードを被っている。また自宅の周りには監視カメラが少ないのを確認したのでそこまで厳密には足取りを追えないだろうと判断した。もし仮に監視カメラを調べて杉本の足取りを追えず不自然だと判断されても、そこから私の殺害にまでは中々結びつかないだろう。

私は改めて殺害から遺体遺棄までの流れを確認した。まず決行の一ヶ月前から数日に一回の夜釣りの習慣をつける。始めた動機を説明できるように釣り漫画を買う念の入れようだつた。杉本は老人らしく早寝の人間であった。チャイム、ノック、電話を駆使して確認したのだが夜の十二時には確実に寝ていた。よつて深夜十二時に杉本宅に侵入することを決めた。

殺害当日に初めて侵入するのは不安要素が大きかつたため一回だけ予行練習を行つた。鍵の掛けかた、いい台所の小窓から侵入を試みたが思つたとおり問題なく成功した。そこで私は杉本宅の間取り(外観と外からの調査である程度把握はしていたが)と杉本が確かに寝ていることを確認した。

ベッドで寝ている杉本を確認した瞬間私は全身が沸騰するかの様な感覚に襲われた。今すぐでも目の前の老婆を殺したいという強い衝動に駆られたのである。今まで感じた怒りによる衝動ではない。純粋な殺人衝動に感じた。今回は確認のためであり殺人のために侵入したわけではない。私は必死に理性を働かせ杉本宅を後にした。

家に帰り私は深呼吸をし自分を落ち着かせようとした。今まで殺害計画に熱中することにより日常で怒りを感じることが少なくなつていて気がする。その反動からか対象を殺せるとなつた瞬間殺人衝動が猛烈に私を支配したようだつた。昂ぶる心を押さえつけ私はより具体的な流れを考えることにした。

一ヶ月以上夜釣りを繰り返し、夜出掛けることが不審ではない環境を作り上げた私はいよいよ決行日を決めることにした。私の出勤時間は基本的に朝だが一ヶ月に一回ほど他の社員や業務の都合上午後から出勤することがある。私はそのシフトになるまで待ち、その前日に殺害を決行することにした。仕事が午後から始まるのであれば夜釣りに行くこともそう不自然ではないし、決行日が平日であればその分夜出歩く人間も少ないと想つたからだ。

決行日の深夜十二時に前述した衣服を身に纏い、予行練習通りに杉本宅に侵入。侵入後は速やかに杉本の寝ているベッドまで行き絞殺を試みる。杉本の

首に紐を巻きつけそれを柱に強く括り付け思い切り杉本を引っ張る。椎骨動脈を閉塞させる所謂首吊りのような状態にして殺す手法をとることにした。人が一人入るカバン(杉本は年相応に小さかつたため入手は容易であった)に杉本を押し込み窓から出してそのまま車のトランクに押し込む。後は目星を付けておいた山に死体を遺棄するだけである。前述した事前調べで山に出向いたときに穴を掘つておいたので、そのままその穴に埋めたら、念のため夜釣りに行つた実績を作つておくため近隣の釣り場に行く。

殺害計画を頭のなかで繰り返す度に胸が高鳴るのを感じた。実際に人を殺せる、殺すということに浮足だつてしまつていて。この心理が殺害時に悪影響を及ぼすことを懸念して私は必死に自己を落ち着かせるため深呼吸や瞑想に努めた。今思えば怒りを沈めるためにこれらの手段を取らなかつたのは私がそれだけ怒りという感情に全てを支配されていた証なのだろう。

瞑想中携帯が鳴つた。私の携帯を鳴らすのは職場の人間だけであり、この携帯は私の乾いた人間関係を象徴していると常日頃感じていた。水曜日、午後から出版社でほしいう趣旨の連絡を見た瞬間私の心臓がドキリと高鳴つた。

ついに殺害計画の条件が全て揃つた。殺害実行日の前日火曜日、本当なら仕事を休みたかったが警察

に疑われる要素は少しでも減らしたい。私は少しでも自然に、あるべきままに業務に努めたが頭の中では殺害計画を何度も繰り返していた。

帰宅し、深夜十二時を待つ間私は体の震えが止まらなかつた。この震えは喜びから来るものなのか、あるいは恐れから来るものなのか。武者震いの様にも感じたがそのどれにも当てはまない気がした。恐らく殺人を犯さないと味わえない震えなのだろう。私は自分の置かれた状況に酔いしれた。時計の針が日付を変わつたことを告げる。イレギュラーな要素が無ければまず成功するだろう。私は犯行のために用意した衣服に身を包み、杉本宅に足を向けた。

「この度は突然のことで……お悔やみ申し上げます」

喪服に身を包んだ私は頭を下げ、香典を差し出し

た。

なぜこのような状況になつたのか。結論から書こう。イレギュラーな要素が発生した。殺害決行日、杉本宅に侵入した私が目にしたのはリビングに横たわる杉本の姿であった。全く想定していなかつた杉本の姿を見た瞬間私はギョッとした。まずい。私の計画した殺害方法はベッドに寝れていることを前提としたものだ。リビングで寝られていては殺害方法をこの土壇場で変える必要が出てくる。自分でもおかしいのだが殺害方法のことばかり考えていたので、

杉本の姿の異様さに気づくのに十秒はかかった。杉本はソファや椅子にではなく床に横たわっていたのである。普通の人間、ましてや老婆はいくら眠気が

強くても床で眠ることはないだろう。

まさかと思い私はそつと杉本に近寄り脈を測る。脈は、無かつた。

私より先に誰かが杉本を殺したのでは。そんな馬鹿な考えが最初に頭をよぎつたがすぐに考えるのをやめた。殺害が実行出来ない以上今すべきことは杉本の死因を考えることではなく、この場を離れることだろう。私はすぐさま侵入してきた窓に戻る。杉本が死んでいるという異様な事態に冷静さを失つていたのかすぐさま窓から飛び出しそうになつたのをすんでのところで止める。小さく深呼吸して外に誰も居ないことを確認した私はそつと窓から出て、自宅へと帰つていった。

「この度は突然のことで……お悔やみ申し上げます」

喪服に身を包んだ私は頭を下げ、香典を差し出し

た。

自宅に帰つた私は落着いて大きく深呼吸をして一連の事態を思い返す。私が殺そうとした杉本は死んでいた。はつきりしているのはそれだけである。現場で思ついた誰かが先回りして殺したというのはまずありえないだろう。思い返してみれば杉本に外傷があるようには見えなかつた。杉本の年齢を考えれば自然死が妥当であろう。ともかく杉本殺害のために練つた計画、労力は全て無駄となつた。現実を受け止め冷静になつた私は怒りを通り越して虚無感を覚えた。一筋の涙すら流していた気がする。

感を覚えた。その日、私は仕事を無断欠勤した。

杉本の死は、それから四日後に発覚した。連絡が取れないことに心配した娘が杉本宅で死体と対面したとのことだつた。どうやら死因は脳出血だつたらしい。当然だが事件性は無いと判断され私の不法侵入が発覚することは無かつた。杉本の死が発覚するまでの四日間私は虚無感に支配されて日常を送つていた。自身の殺人衝動を認めてから今に至るまで人を殺すことのみ考えていた。その動機は自分の怒りを収めるためである。確かにその試みは上手くいつた。私の心は殺人衝動に支配され怒りを抱くことが大きく減つた。

入念に準備した殺害計画が水泡と化した。まるで人生最大のドミノがあと一步で完成するという瞬間、全て崩されたようだつた。それにもかかわらず私の心は怒りではなく虚無感に支配されている。今、喪服に身を包み杉本の遺影と相対していても怒りよりも先に生き甲斐を奪われたかのような虚無感に支配されているのだ。

それにして一殺そうとしておきながら神妙な顔で遺影に向かい合い、さらには杉本の娘にお悔やみを申し上げていた私の姿は、客観視したら相当間抜けの様に思える。そう考えると思わず笑いそうに

なつたため、軽い嗚咽の振りをして誤魔化すのだった。

殺そうとした杉本が自然死していた。まだまともな感性が私に残っていたなら「人の道を踏み外そうとしていた私を止めるために神が事を成したのだ」などと考えていたかもしれない。しかし私の心にあるのは一つ、虚無感だった。

殺人衝動を満たせなかつた私はまるで抜け殻のようだつた。最初は怒りを解消するための手段であつたはずの殺人が今や目的となろうとしていた。再び自分を取り戻すためにはもう誰でも構わない。殺すしかない。そんな妄動にも似た考えが私を支配していた。

最初に通り魔殺人を考えたのだが、ここでもネットになつたのは監視カメラの存在であつた。自宅の近くで通り魔殺人をするわけにはいかないが、かといつて遠くに足を運べばその分目撃の可能性も高くなる。凶器の入手系統や職務質問の危険性も含める現実的な案とは言えなかつた。

次に思い立つたのは自殺志願者を殺すことだつた。集団自殺を募集してることに紛れ込み、その中の一人を言いくるめて二人きりで自殺しようと誘う。これなら自殺に見せかけて自分の手で殺すことが可能かもしれない。私は早速インターネットで集団自殺の募集サイトなどがないか調べてみた。しか

しインターネットがアンダーグラウンドな世界だつたのはもう何十年も前のことらしい。今は規制が強いか、あるいは自分のような素人には見つけられないような地下深くに潜つたのか。それらしいキーで検索をかけてもついぞ見つけることは出来なかつた。

自殺について検索しているとタイムリーなことに付けっぱなしだつたテレビのニュースが今朝起きた自殺を報じていた。朝早くに会社員が電車に飛び込み自殺をしたらしい。私は妙なシンクロに苦笑した。

そのとき出勤していたサラリーマンは大変だな、と通勤時の混雑を多い浮かべた瞬間私の脳裏に電撃が走つた。朝の通勤ラッシュ時、ホームには人が多く並んでいる。先頭の人間のすぐ後ろに並び、電車が来た瞬間その背中をそつと押して線路に突き落としまえば、それは私がその人間を殺したも同然ではないか。通勤ラッシュ時、後ろに立つ人間が前にならぬ失敗をするのではないかと思つた私は洗面所に冷水を溜め、顔を浸した。

顔を上げた鏡の中の私と目が合う。思えば鏡を見るのも久々な気がする。私はこんな顔をしていたのか。久々に顔を突き合わせたそれは昔と何かが変わつた気がした。なんとなく鏡像と目を合わせてい

もし仮に警察に取り調べを受けても後ろの人に押されたと言い張つてしまおう。なんせ動機が無いのだから言い逃れるはずだ。仮に言い逃れられなかつた場合の懲役も覚悟の上だ。それほどまでに私の心は殺人に飢えていた。

直接手を下せないのは残念だが杉本と同程度の好条件の殺害対象が見つからない今、最良の殺人方法に思えた。抜け殻だつた私の体に再び血が流れるような感覚が襲つた。この手しかない。明日にも実行しようと決めていた。

朝、目覚ましの音により目を覚ます。杉本を殺害する予定だつた日以来の清々しい目覚めだつた。いつもと変わりなく出勤の準備をしたのだが、ふと気づくと鼻歌を歌つていた。鼻歌を歌うのなど何年ぶりだつただろうか。こんな浮ついた心では何か思ひぬ失敗をするのではないかと思つた私は洗面所に冷水を溜め、顔を浸した。

顔を上げた鏡の中の私と目が合う。思えば鏡を見るのも久々な気がする。私はこんな顔をしていたのか。久々に顔を突き合わせたそれは昔と何かが変わつた気がした。なんとなく鏡像と目を合わせているとまるで自分が自分でないような感覚に襲われ、どこまで吸い込まれそうな錯覚に陥つた。ふと我に返り気がついた。

変わつたのは目だ。

黒目の中がどことなく濁っている。そう、中央を見つめて初めて分かったのだが確かに濁っているのだ。「これは人殺しの目なのだ」なんとなく私は直感した。この何かに取り憑かれたかのように濁っている目こそ人殺しの証なのだろうと。

いつもの駅のホームについた私は電車を一本見送り、ごく自然に列の二番目に立つた。目の前に立っているのはくたびれた中年男性であつた。猫背気味の背中は人生に疲れているような印象を与える。この男を突き落としてもテレビでコメントテーザーが現代社会の闇を語つてお終いだろう。次の電車がくるのは三分後だった。三分後この男が死ぬ。三分後この男を殺す。そう考へると浮足立つてしまつた。今思えばそれがいけなかつた。そわそわしていた私は無防備な背中を押され、目の前の男のかかとを踏んでしまつたのだ。中年男性がこちらを振り返る。まづい、警戒されたか。私が思わず動搖しているとその男は軽くこちらに笑いかけ、頭をペコリと下げる。とスッと隣に一步移動して、隣にどうぞというジェスチャーをした。

その瞬間、まるで私に取り憑いたなにかがスッと消えていくような、そんな感覚に襲われた。久々に触れた人の優しさや思いやり、それが私の怒りや殺人衝動を溶かしていくかのようだつた。

私はその男に会釈をすると一步足を前に進めた。

そして今まで自分は何を考えていたのだろうと自問自答をしていた。人の悪意ばかりに敏感になつていて優しさや思いやりというものを忘れていたのか。

その結果が隣人や隣の男の殺害などはどうかしている。私は急激に正常な感覚を取り戻していった。

自分の異常さに改めて気づくと同時に、一線を踏み越えなかつたことに安堵した。そう、私は人間としての一線を越えようとしていたが、寸でのところで思いとどまることが出来たのだ。杉本の死といいこの優しい中年男性に巡り会えたことといいまるで神が一線を超させまいとしているようだつた。

私は自分の幸運に感謝した。ああ、もうすぐ電車が来る。また日常に戻ろう。今度からは自分から人に優しく思いやりを持つて接しよう。そうすれば世界も優しくなるはずだ。

私がそう考えた瞬間不意に衝撃を感じた。気づくと私は線路に落ちていた。思わず顔を上げると驚く中年男性の隣で、恐らく私の後ろに立つていたであろう男が、無表情にこちらを見下ろしていた。

その男の目が、鏡像と同じ目をしていることに気づいた次の瞬間、電車の警笛がまるでシャッター音の様に聞こえ、急に全てが闇になつた。

作者のコメント

この作品は主人公が自分を線路に突き落とした男が自分と同じ目をしていることに気づいてから死ぬまでの間に、自分がなぜこうなつたかを回顧しているという作品です。

自分の隣人が、駅で出くわす赤の他人が、平気な顔して自分を殺そうと企んでいる。まるで被害妄想の様ですがその妄想が実は現実だつたら。そう考えると怖いなというのが物語の原点でした。

人殺しは皆等しく恐ろしい存在だと思いますが、あえて順序を付けるなら営利目的で殺人を犯す人より、自身のフラストレーションを発散するため人を殺す方がより怖い気がします。

自分の周りにいる人が実はそんな恐ろしい存在かもしれない。そんな恐ろしい存在は日常生活を送りながら誰も知らないところで虎視眈々と殺人を計画しているかも知れない。そしてそれは特別な一人ではなく、何人もいるのかもしれない。

あまり考えすぎると自分で被害妄想を発症してしまいますのでここで筆を置きます。

イデア旅行記

経済学部
現代ビジネス学科 2年

手塚 航

そこは世界でただ一つだけの国だった。

知識を正方形の『触れられる情報体』に変換して売ったり、肌で得た経験を脳から抽出して大きな丸い球体に変質させてから買い取るといった活動が、この国的一大産業となっている。

私はそんな不思議な国、イデア共和国を訪れた。

私は旅好きな、経済学を専攻するごく普通の学生だ。

中国やオーストラリア、アメリカやロシアなどの大國から、ニューカレドニアやパナマにマダガスカルなどの小さな国まで色々な国に訪れてきた。

基本的に一人旅が好きで、我が身一つで困難も快樂も発見もしてきた。

それは今も、これからも役立つと信じている。

そんな私の目に留まつたのはとあるネットブロ

グの記事だつた。

『知識が取引される国、イデア共和国に行つてみた!』

私はその記事の内容が気になり、トピックのページを開く。

最初に目に入つた文にはこのような事が書かれていた。

『イデア共和国は世界にただ一つだけの知識を取りする摩訶不思議な国! イデア共和国は大西洋に浮かぶ小さな島島国で、日本では知名度が低いものの確かに注目を集めています。この国的一大産業は知識で、人々の頭の中にある知識や経験によって培つた技術などを『触れられる情報体』に

変換し、それを他者に移せるというものの、私も自

分の知識を売つたり、他の人の知識をもらつたりしました。知識を取り込んだ感想としては、お店で買った知識がまるで元から自分の知識の様に残つています。これは知識を得た人にしか分から

ないと思います! この記事を見た貴方もこの不思議な感触を体感してみてはいかがでしょうか!』

記事には執筆者が現地で取つた写真がいくつか掲載されていたので一枚一枚見てみる。

執筆者は市場に売つている『固形化された知識』という物を買い、今までに無い、新たな知識を得たらしい。

一枚目の写真を見ると『固形化された知識』は

どれも七色に光る綺麗な正方形で、中ぐらいの大きさの段ボール位の大きさのものから箱根の寄木細工と同じぐらいの大きさの物までまとまりが無く、テントのような市場の出店の中で所狭しと並べられ、それがどういう知が固形化されているかを表すのであろうラベルが貼られている。

下の方を見ていくと『固形化された技術』に関しての記述も見つかった。

『この島で取引されているのは正方形の知識だけではありません。人が経験によつて得た体感的な技術も『固形化された技術』として売られています。こちらは七色に光つているのは『固形化された知識』と同じですが、形は正方形ではなく綺麗な球体なんです。こちらも大小様々で、大きいほど膨大な技術が詰まつていて、小さいほど限定的な技